

第4章 抑うつ傾向はどのような文脈で生じやすいか？

—対人的文脈の重要性—

第2章と第3章において、抑うつ傾向の発生には、その素因をもつこととストレスというきっかけが必要であることが論じられた。しかしながら、抑うつ傾向の素因やストレスにも、様々な文脈における素因やストレスがある。学業領域における素因（目標志向性）やストレスもあれば、対人関係領域におけるものもある。

目標志向性の観点から抑うつ傾向や適応関連の変数を予測する従来の研究の多くは、「学業領域」における目標志向性に焦点を当ててきた（Ames & Archer, 1988; Elliot & Harackiewicz, 1996; Elliott & Dweck, 1988; Hayamizu, Ito, & Yoshizaki, 1989; Midgley, Kaplan, Middleton, Maehr, Urdan, Anderson, & Roeser, 1998; 桜井, 1995; 杉浦, 1996; 田中・山内, 2000; 上淵, 1995; 渡辺, 1990 など）。これに対して、「対人関係領域」における目標志向性を取り上げて抑うつ傾向を予測した研究は、ほとんど行われていない。

しかしながら、対人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響について検討することは重要である。Hammen (1999) によれば、抑うつ傾向の原因や発生メカニズムを検討するにあたっては、対人的文脈を考慮することが重要であるという。何故なら、抑うつ傾向は対人関係の中で生じやすく、対人関係での問題が抑うつ傾向の発生と強く関係しているためである（Hammen, 1999; Hammen & Goodman-Brown, 1990; 高比良, 1998）。例えば、抑うつ傾向やうつ病に陥りやすい者は、ストレスでも特に対人関係におけるストレスを引き起こしやすく、その結果として

自滅的に抑うつ傾向やうつ病に陥ることが示されている (Hammen, 1991 ; Herzberg et al., 1998 など). そして, 思春期におけるストレスに関する研究から, 日常の学校生活における様々なストレスの内, 友人関係に関する出来事が特にストレスフルであると評価され, 友人関係のストレスは学業のそれより抑うつ傾向を含めた多くのストレス反応と関係していることが示されている (岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992 ; 戸ヶ崎・岡安・坂野, 1997). また, 日常的な経験や観察からも, 思春期においては, 対人関係の中で他者からの評価に敏感になり, 容易に傷ついてしまう子どもが多くいることが予測される. 対人関係における問題をきっかけにして抑うつ的になり, その後対人関係を積極的に構築することができなくなれば, その子どもは, 社会的スキルを学習したり, パーソナリティをより豊かにする重要な機会を失うことになるだろう.

以上を踏まえると, 対人関係という文脈の中で, 抑うつ傾向がどのようなメカニズムで生じるかを検討することが重要である.

ところで, 一口に対人関係といっても, 友人関係, 親子関係, 教師との関係など様々ある. 中学生を対象とする本研究では, これらの内, 友人関係を取り上げる. その理由としては, 以下の3点が上げられる. 第1に, 児童期から思春期・青年期に移行するにあたり, 重要な対人関係は親や教師との関係から友人との関係に移り, 友人関係の中で生活する時間的割合が, 親ないし教師との関係の中で生活する時間的割合より多くなると考えられるためである. 第2に, 思春期における友人関係には, 3つの重要な機能があるためである (松井, 1990). つまり, 友人関係には, 家族以外の他人との接し方を学ぶ機会となるという「社会的スキルの学習の機能」, 様々な経験や考え方をもつ友人と接することを通して, その経験や考え方を自分の中に取り入れられるという「モデルの機能」,

自分が不安や心理的問題を抱えている時にそれを緩和する「安定化の機能」の3つの機能がある。従って、友人関係において落ち込みやすく、消極的になって関係を積極的に構築できないことは、友人関係で学ぶべき多くの機会を見逃してしまうことになると考えられる。第3に、中学生を対象としたストレスに関する研究（岡安他，1992）から、友人関係におけるストレッサーは、それ以外の関係（教師との関係）よりも、抑うつ傾向を引き起こしやすいことが示されているためである。

以上より、本研究では、対人関係の中でも特に友人関係を取り上げ、友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響について検討する。